

21PO-am408

広範な現場体験からみた早期体験学習の意義Ⅲ

○内海 美保¹, 奥井 順子¹, 山原 弘¹ (¹神戸学院大薬)

【目的】地域の保健医療福祉分野に寄与できる薬剤師の育成に向けて導入された早期体験学習は、改訂版薬学教育モデル・コアカリキュラムでも「患者・生活者の視点に立って、様々な薬剤師の業務を見聞し、その体験から薬剤師業務の重要性について討議する」などの目標が掲げられ、より早い段階から地域のニーズや薬剤師の役割を理解していくことを求めている。本学では、4月にすべての学生が薬局を訪問し、9月は学生の希望に応じて病院、製薬企業等を訪問する早期体験学習を実施している。2015年以降、同授業の在り方を検討するために、多角的な調査を実施しているが、今回は同授業が学生に与えた影響等を評価したので報告する。【方法】2018年4月及び9月に薬局及び施設を訪問し、班ごとに訪問施設の業務内容や社会における役割をまとめ、発表会を行った。発表会終了後、自記式評価票にて学習の到達状況や感想等を記載してもらった。【結果・考察】4月及び9月、それぞれ238名、234名の学生から回答が得られた。訪問を通して薬剤師に必要なことは何であると感じたかを問う質問では、4月、9月ともに「コミュニケーション力」「思いやり」「責任感」「正確さ」と答える学生の割合が多かった(80, 56, 53, 52%)。「問題解決能力」や「向上心・意欲」と答える学生は10%前後に留まったが、「実際に薬剤師が病院や他の医療機関に貢献している姿を見て、自分が将来どんな薬剤師になるかではなく、どのように活躍する薬剤師になるかという目標への意識が変わった」「自分の将来に対する視野が広がった」「薬を販売するまでにとっても長い過程があると知り、薬を作ることには責任感が必要だと感じた」などの自由記述が得られ、将来に繋がる深い学びができていたことが推察された。